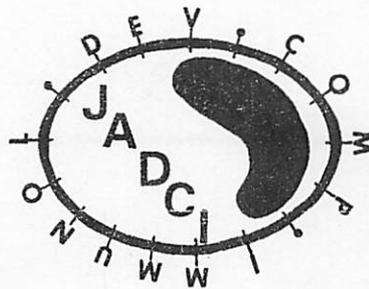


JADCI News

No.28

2005. 11. 11



The Japanese Association
for Developmental and
Comparative Immunology

<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jadci/index.html>

Office address:
Department of Biology,
Nihon University School of Medicine,
Itabashi-ku, Tokyo 173-8610

目次：

	頁
Love-Forty, You are not finished yet!	吉田 彪 ----- 1
小野道風とかえる (オノトウフウと蛙)	古田 恵美子 -- 3
日本比較免疫学会「活性化委員会」について	中尾 実樹 ---- 5
日本比較免疫学会第 18 回学術集会へ向けて	藤井 保 ----- 6
日本比較免疫学会第 17 回学術集会を終えて	瀬尾 直美 ---- 7
日本比較免疫学会第 17 回総会議事録	----- 9
会員名簿追加・変更	----- 11
事務局より：所属変更時の通知依頼/会費納入願い	----- 12
会員名簿記載事項変更用紙	----- 13

発行者：日本比較免疫学会会長 古田恵美子

事務局：庶務・会計 宍倉文夫

補助役員 大竹伸一 阿部健之

住所：〒173-8610

東京都板橋区大谷口上町 30-1

日本大学医学部生物学教室内

事務局 e-mail: jadcitnk@med.nihon-u.ac.jp

電話：03-3972-8111 内線 2291 (生物学教室)

Fax. : 03-3972-0027 (医学部庶務課扱い)

郵便振替：口座番号 00120-4- 18034

加入者名 JADCI

1978年の7月のある日、「今週末、家でディナーするから来てくれ」と、いつもの調子で大学の同僚教官（米国はコネチカット州のお話）の一人から誘われたので、夏だから庭でバーベキューでもするのだろうと思い承諾した。指定された時間より10分か15分遅れて（これは料理が間に合いそうになくてバタバタしているであろう奥さんへの配慮）玄関から入ると、リビングルームには同僚夫婦だけが居て出迎えてくれた。「これでも早すぎたかな」と思っていると、急に賑やかになって、“Happy Birthday to You, Happy Birthday Dear Takeshi, Happy Birthday to You!”と歌いながら研究室の大勢の仲間や学生達が出てきた。本人だけが知らされていない、いわゆる“surprise party”と言う奴だ。乾杯に次ぐ乾杯、そして皆から心尽くしのプレゼントの数々。その中に今でも決して忘れない一つのプレゼント。優秀な女性大学院生ナンシーがTシャツを一枚くれた。背中には中年男がテニスラケットでボールを打つ絵があって、その上に“Love-Forty, You are not finished yet!”と書いてある。なんとウィット！その頃の私は大分落ち込んでいて、英語ではmiddle age crisisだったのだ。初老期うつ状態である。もう40歳になってしまった（その7月に）のに、どれだけのことを達成できたのか、という思い。それに気付いていたナンシーはその頃熱心に私がやっていたテニスをもじって励ましてくれたのだ。テニスの得点の数え方、0-15, 0-30, 0-40 といって次に落とせばそのゲームは負けである。テニスでは0をloveとコールするのはご存知の通り。「まだゲームは終わっていない。もう一点ある。だから、40代を愛しなさい」。素晴らしい激励にその後私もスランプを脱して仕事に励むことが出来たのは言うまでもない。

個人的な思い出話で貴重な紙面をこれ以上使うつもりはない。実は、今年8月に開催された日本比較免疫学会の第17回学術集会も近づいた頃、事務局やプログラム委員あたりからか、どうも一般演題が余り集まっていらないらしい、という声が聞こえてきた。学術集会はどうなる事かと危惧していたが、結果的にはとても面白い演題やシンポジウムにも恵まれて、成功し、盛会であったと私は思う。しかし後で聞くとところによると、演題締め切り間際に、会長始め関係者が友人の研究者達に連絡して、演題を出してくれるようお願いした結果、どうやら例年程度の“演題数”を確保したらしい。例年程度と言うが、事実はこちら数年はいつもこのような状態（締め切り間際に演題集めをする事）であったらしい。これは学会にとって由々しき問題ではあるまいか！

学会は大きければ面白いというわけではない。一例をあげると、上述した私の40歳の誕生日より数年前に、アメリカで世界の研究者を集めて第一回リ

ンホカイン・ワークショップを開くのを手伝いました。予算の関係から定員50名くらいに絞らねばならなかったが、絞るのにそれほど苦労した記憶はないから、シンポジスト以外の一般参加希望者はそれほど多くはなかったと思う。しかし、数日間に亘る缶詰状態での発表とディスカッションは熱気を帯びたものだった。歴史に残るような仕事がいくつも発表された。その後、年毎に参加者は200、300と増えていったが、それに連れて何だか情熱も希釈されたように感じた。端的に言って会が面白くなって行ったのである。細胞性免疫のメディエーターの研究が余りに細分化されて、全体観を失い生体内での意義を一時忘れて行ったからかも知れない。

学会に限らずどういう組織（例えば、研究所）でも10年も経つと所謂マンネリ化して、創設期の活気が失われるのを常とする。我が日本比較免疫学会も創立後17年を経て、その初期の頃の“面白さ”が欠けてきたのだろうか。本学会の創立に携わってきた古田会長や村松前会長などに聞いてみると、少人数でもいろいろな分野から集まった比較免疫学研究者は、当時熱を帯びてディスカスし、大変に面白く楽しい学術集会を持てたと言う。そうであれば、そういう学会に参加するのを毎年心待ちにし、自分の研究を発表して常日頃は離れていてディスカスできない研究者と討議できるのを楽しみにすることだろう。

面白い研究の発表される面白い学会はいつも盛会である。そこでは必ず何か得るものがあると会員が考えるからだ。では日本比較免疫学会はつまらない学会、参加しても何も得るところの無い学会になってしまったのだろうか。それで一般演題を積極的にこの学会に出す意欲が会員になくなってきているのだろうか。日本の学会の平均寿命は知らないが、ハイティーンの本学会は人間の命に例えると初老なのだろうか。そうだとしたら大変である。原因は幾つか考えられるであろう。

こう考えて、この学術集会初日に開かれた役員会で、日本比較免疫学会に「活性化委員会」を作って、そこで活性化の対策を立ててもらってはどうか、と提案して大方の賛同を得た。既に九州大学の中尾実樹先生を委員長として活動を開始されつつあると聞く。その提案に期待するところは大きい、どのような提案であれ、それを如何に実行に移していくかにその成否は掛かっている。そしてその実行は、活性化委員の仕事というよりは会員一人一人のこのころ構えによるところが大きい。自分の“面白い”研究の成果を、同興の志や競争相手の集う“面白い”学会で発表しディスカスできる楽しみを思い起こす事に尽きるのである。

日本比較免疫学会の諸兄姉！本学会は学会としては初老期に入っているのかも知れないが、It is not finished yet! である。それを落ち込ませる事無く、激励し成長期にもう一度乗せたいと願うものである。

小野道風とかえる
(オノトウフウと蛙)

比較免疫学研究所
古田恵美子

水に満たされた青田の中で、蛙の大合唱が聞こえてきて、“うるさいぞー”などと、怒鳴った子供の頃。あれはトノサマガエル (*Rana nigromaculata*) の恋の歌。そしてアカガエル (*Rana japonica*) も。

大学での一般教養の生物学実習は、蛙の解剖から始まったものでした。トノサマガエル、ヒキガエル (*Bufo japonicus*) ウシガエル (*Rana catesbeiana*) など懐かしい動物です。しかし、いまでは蛙といえばアフリカツメガエル (*Xenopus laevis*) が主たる実験動物になりました。いつしか日本の田んぼからは、トノサマガエルもアカガエルもきえて、ダルマガエル (*Rana brevipoda*) がはびこっているのです。

昔、と言ってもそれは平安中期迄遡るのですが、小野道風 (894~966) という貴族がおいでになりました。彼は若いときから“書”に秀でていて、後に“書”における“和様”の基礎を築いたと言われています。

若かりし頃、彼は“書”の道に迷いが生じ、昨日までの“書風”に飽き足らなくなっていました。今で申せば、完全なスランプに落ち入っていた彼は、或る雨の日、ウツウツとして川の辺を歩いておりました。立ち止まっては水の流れ行くさまを眺め、風に揺れる川辺の柳に目を留めて……。フト気づくと、その柳の枝に一匹の蛙の跳び付いては落ち、落ちては又跳びつく姿が目に入りました。彼はそこに長いことじっとたたずんで、その様子を見ていました。そして、何度失敗しても柳の枝に挑戦する蛙を見て、突然開眼したのです。{挑戦する心} は、何事においても大切であると！！彼は、かの有名な小野たかむらの孫、気骨のあるところは矢張り同じ血族でした。ちなみに、新潟大学名誉教授岩澤久彰先生にお聞きしましたら、この蛙はアマガエル (*Hyla japonica*) であるとのことでした。

私が、国民小学校1年生か2年生のころ、学校の“終身”の本か我が家の修身教育かは忘れましたが、上記の「小野道風とかえる」の話は、私の脳細胞に明記されているのです。話の終わりは必ず教訓があるものでした。この教訓は、「失敗を恐れず何度でも挑戦してこそ事は成る。」でありました。

以前私は、この JADCI News に「大発見は偶然によることが多い」(2005、No27) と書きました。それとこの小野道風の話は、裏腹のようですが、私達科学する者にとっては、いずれも大切な事象であると考えています。何度でも挑戦して正しい結果を得ること、偶然の事象を大発見に結びつける基礎的な

知識を、常に身につけていること。これが、科学者たる者の資質であると思うのですが。

役員メンバーのひとりである吉田彪先生（実は“サイトカイン”の命名者であることを恥ずかしながら最近知りました。）のご提案で、当学会に{活性化委員会}が設けられました。是非会員の先生に、新しい事への挑戦と大発見に結びつくような研究に力を注いでほしいと願っています。

秋雨前線の停滞で鬱陶しい日が続いています。真っ青な空を望みながら無脊椎動物の文献に挑んでいます。

追記

科学雑誌 {ミクロスコピア} に連載されている{蛙}の筆者、新潟大学名誉教授岩澤久彰先生（両生類学）から色々面白いお話をうかがいました。

ダルマガエルの命名者は、名古屋大学医学部生理学教授の先生で、実験用のトノサマガエルをバケツに入れて帰ったところ、翌朝、あるものは、バケツの中から逃げ出し、あるものは、バケツに留まっていたそうです。そこで、かの先生は、逃亡者と非逃亡者をつぶさに調べたところ、形態的に違いがあることが分かりました。逃亡者はトノサマガエル、そして非逃亡者は、ずんぐりむっくりしていて、足が短く水が好き（浮いている）ということから、これをダルマガエルと命名しました。

ダルマガエルは、中国南部に分布していて、日本に入ってきたもの。トノサマガエルは、朝鮮半島から日本にきたもの（行動力旺盛）で、東京ダルマガエル (*Rana brevipoda porosa*) は、ダルマガエルとトノサマガエルの中間型を示す雑種であるとのことでした。因みに、ダルマガエルの原型は今でも岡山地方に見られるそうです。関西では、この二つの蛙をちゃんと区別していて呼び名もダルマガエル（足が短く寒さに弱い）を、“ゲエル”、トノサマガエル（足が長く寒さに強い）を“カエル”と言い分けているそうです。

日本比較免疫学会「活性化委員会」について

九州大学大学院農学研究院 中尾実樹

本年8月24日に開催された日本比較免疫学会(JADCI)役員会で、標記のような委員会を立ち上げ、JADCIを活性化するための提言をまとめることになりました。委員として、飯島亮介(帝京大)、阿部健之(日本大学)、木村美智代(埼玉医科大学)、谷合幹代子(農業生物資源研究所)、安住 薫(北海道大学)、中尾実樹(九州大学)(以上敬称略)が役員会で推薦されました。私はこの委員会の取りまとめ役を勤めさせていただきます。私がJADCIに参加し始めたのは第4回(1992年)からですので、会員としては第2世代と表現できるかもしれません。この学会を熱い想いでリードしてこられた創立メンバーの先生方のもとで、これまで温々と学術集会を楽しんできましたが、これを機会にJADCIに何らかの恩返しをさせていただけたら、と考えております。

この委員会に求められているのは、半年程度の期間を限度として何らかの方策を役員会・総会に提言することです。そもそも「学会の活性」にもいろいろな面があると存じますが、JADCI活性化委員会が今回取り組むべき主な課題は、「学術集会への自発的な参加者・発表者の数(特に大学院生や若手研究者によるもの)を増やす」ことだと理解しております。

まだ委員会での議論が本格化していないのですが、自由闊達な雰囲気、これから方策を議論していきたいと考えております。(議論の展開によってはアンケートをお願いすることもあるかもしれません。)JADCI会員の皆様のご意見をいただければ幸いです。ご意見はメールでお寄せいただいても結構です。(中尾宛:miki_n@agr.kyushu-u.ac.jp)

日本比較免疫学会第 18 回学術集会へ向けて

第 18 回学術集会会長

藤井 保 (県立広島大学)

この度、第 18 回学術集会を県立広島大学でお世話させていただくことになりました。学会員が会長一人だけと言う甚だ心許ない状況で、これまでの 17 回の学術集会のような丁寧な準備や対応はできかねますが、学術集会の成功のために微力を傾注したいと思っております。会員各位のご協力を宜しくお願い申し上げます。

さて、会員歴の長い先生方にはご承知のように、日本比較免疫学会のルーツは、日本動物学会の大会シンポジウム（関連集会）として開催された「比較免疫学シンポジウム」にさかのぼることができます。実は、その第 1 回目の集会が、日本動物学会第 47 回大会シンポジウムとして、1976 年 10 月 4 日に広島市（広島大学総合科学部）で開催されています。この大会・シンポジウムは、当時、修士課程の大学院生であった筆者が初めて参加した「学会」でもあり、未だに印象に残っています。新潟大学や北海道大学の恩師が開会挨拶や講演をされていることも、印象に残っている要因でしょう。あれから 30 年が経過しようとしています。30 年目にあたる来年度、本学会に繋がる記念すべき第一歩を記した広島市で、第 18 回学術集会を開催させていただけることを、貴重な「ご縁」と思い、また光栄に存じております。

第 18 回学術集会の会場は、県立広島大学の本部機能を有している広島キャンパスを予定しています。同キャンパス（南区宇品東）は、水の都「ひろしま」の中心部にあり、県立高等女学校・専攻科、広島女子専門学校以来の伝統校、広島女子大学のキャンパスでもあります。（県立広島大学は女子大を含む広島県立 3 大学を統合し平成 17 年 4 月に開学したばかりです。女子大は、在学している来年度も並存しています。）会期は、平成 18 年 8 月 23 日（水）から 25 日（金）を予定しています。企画については、未だ検討が不十分な段階で具体的な言及はできかねますが、本学会の存在意義を生命科学の広い分野にアピールする「発信の場」にできないか、今少し愚考したいと考えています。学術集会の活性化、ひいては、本学会の活性化に繋がるご示唆やアイデアを、多くの会員からいただけることを期待しています。何とぞ、宜しくお願い申し上げます。

日本比較免疫学会第 17 回学術集会を終えて

東京医科大学生物化学教室 瀬尾直美

日本比較免疫学会第 17 回学術集会は、東京医科大学第一校舎の第一講堂で 2005 年 8 月 24 日～26 日に開催されました。学術集會長の伊藤正裕先生率いる本学解剖学第一講座の全スタッフが一丸となり、会場設営や会期中の運営・進行に当たってくださったお陰で、組織化された良い集會であったと自負しております。ただ、今年も台風 11 号 (MAWAR: ばら) 接近の影響を受け、シンポジウム、懇親会当日の 25 日は朝からの大雨で、夜の懇親会をキャンセルされるシンポジストの先生が多くおられたことは大変残念でした。

今回、一般講演は従来の動物分類群によるセッション分けではなく、機能別に「生体防御関連細胞の形態と機能」、「各種成分・遺伝子のクローニング」、「生体防御機構」、「生体内物質 (レクチン・酵素)」の 4 つのセッションに分けて行われました。動物種を越えた白熱した討論に、進行係は時間調整で苦労したようです。また、シンポジウムは第 6 回比較三学会シンポジウム「パターン認識と情報伝達」とシンポジウム「脾臓: Organ of Mystery」が同日に開催され、約 80 名の参加を得て、有意義な討論が繰り広げられました。なお、シンポジウム、懇親会には本学学長の伊東洋先生はじめ、基礎医学、教養の先生方にもご参加いただき、学内で開催した意義の一つを感じることができました。懇親会後の恒例の二次会は、例年、スタッフがお酒を何回も買いに走ることから、今年は、解剖学の二次会担当の若い先生方がビール、日本酒、ワイン、ウイスキー等を十分に用意して、夜明かしを覚悟してスタンバイしておられました。しかし、今回の二次会は台風の影響で、東京周辺の先生方は家路を急がれ、宿泊された先生方での静かな会となりました。

思い起こせば、2004 年の春に第一回の解剖学・生物学合同準備委員会が古田会長をお迎えして行われ、シンポジウムのテーマやシンポジスト候補の先生方もほぼ決定し、順調な滑り出しでした。しかし、何事も思うようには進まないもの、参加申込み締め切り間近になっても、演題と参加者が集まらないという事態に、慌ててしまいました。役員の皆様のご努力により、あっという間に 32 演題が集まりましたが、要旨集印刷

の直前まで要旨を受け付けることになり、プログラム委員の中村先生のご苦勞は大変なものでした。

パワーポイントによるプレゼンテーションは、コンピュータ世代のスタッフのマンパワーに支えられて、大変スムーズに進行いたしました。しかし、実際には、お持ちいただいたデータと会場で用意したパソコンとのマッチングに問題があり、受付でデータに手を入れていただくこともあったようです。第 15 回学術集會長の山崎先生も集會後記に書かれておられますように、データをあらかじめ大会事務局に提出いただくことが必要と強く感じました。さらに、学術集會の窓口を務めさせていただきました立場から一言申し上げますと、総会で和合副會長からご報告がありましたインターネットによる参加申込みの導入と要旨・アブストラクトのフォーマットの刷新の検討が早急になされることを願っております。

今回の学術集會の開催にあたり、シンポジストの先生方、宍倉先生をはじめとする学会事務局の皆様方、プログラム委員の中村先生をはじめとする関係者の方々に大変お世話になりました。第 17 回学術集會伊藤正裕會長に代わり、心より厚く御礼申し上げます。

第17回日本比較免疫学会総会議事録

日時：平成17年8月24日（水） 12：45～13：00

会場：東京医科大学 第1講堂

会長挨拶： 古田恵美子会長

議長選出： 古田恵美子会長

第17回学術集会会長の挨拶：伊藤正裕学術集会長

第17回学術集会開催にあたっての挨拶と、プログラムの特徴として、従来の動物分類群にしたがった Session 分けから、今回は機能別からの Session 分けを採用した点などについての説明がなされた。

報告事項

(1) 会務報告（事務局：宍倉文夫）

- 1 ニュース(JADCI News)の発行状況について、以下の報告がなされた。
26号（発行日：16年11月30日）、27号（発行日：17年4月6日）を発行した。

次号（28号）は、平成17年11月11日の発行を予定している。

- 2 会長選挙について、以下の報告がなされた。

投票用紙の郵送（News28号に同封）：17年11月11日（金）

投票締切（必着）：17年12月14日（水）

開票： 17年12月16日（金）

併せて、2年以上会費を滞納している会員宛には、投票権がないため投票用紙を郵送しない、と説明があり、会費の納入をお願いしたいと要請があった。

(2) 次期（2006年）学術集会について

（次期学術集会長：藤井 保、代理：増山悦子）

次期（第18回）学術集会は、県立広島大学が担当して開催予定。

日程は平成18年8月23日（水）～25日（金）、会場は同大学の広島キャンパスである旨の説明がなされた。

(3) 次次期（2007年）学術集会について（次次期学術集会長：鈴木 譲）

次次期（第19回）学術集会は、静岡県浜名郡にある東京大学付属水産実験所が担当して開催予定である旨の説明がなされた。

(4) 日本比較三学会合同シンポジウムについて（副会長：和合治久）

本年度の第6回日本比較三学会合同シンポジウムは、当番学会である日本比較免疫学会が企画し、この学会会期中の平成17年8月25日（木）9：00～12：20に、「パターン認識と情報伝達」のテーマで開催されること、来年度の当番学会は、日本比較生理生化学会である旨の報告がなされた。

(5) ISDCI について

- 1 DCI の Conference report について（抄録委員：飯島亮介）

第16回学術集会の Conference report は Dev. Comp. Immunol. Vol.29 (2005) 825-828 に掲載済みである。本年度の Conference report も同様にかたちで伊藤正裕学術集会長にまとめてもらう予定である旨の報告がなされた。

2 ISDCI について (副会長：和合治久)

国際比較免疫学会 (ISDCI) 第 10 回会議が、以下の予定で開催される旨の報告がなされた。

Online submission を採用しているとのこと。

会期：2006 年 7 月 1 日～6 日

開催場所：Charleston Place Hotel, Charleston, South Carolina, USA

大会長：Prof. Gregory Warr (Medical University of South Carolina)

問合せ：warrgw@musc.edu

(6) 役員からの討議事項の提案 (会計監査：吉田 彪)

1 会費滞納者について

会費の滞納者が、諸般の事情で退会扱いとならずに存在しているようであるが、今後、会費未納者は会則に従って処理してはどうかとの提案があり、総会参加者の拍手によって承認された。

2 学会の活性化について

最近の本学会の活動に、やや低迷の懸念があることから、今後の学会活動の活性化を促進するため、その方策を検討し答申案を作成するタスクフォース (学会活性化委員会のようなもの) を発足させたことが、報告された。

(7) その他

1 要旨集の書き方について (副会長：和合治久)

講演要旨集のフォーマットの刷新を考えている旨の報告がなされた。

2 学術集会の参加申し込みの方法について (副会長：和合治久)

インターネットによる参加登録の方法も検討している旨の報告がなされた。

審議事項

(1) 平成 16 年度の会計決算 (事務局：大竹伸一)

平成 16 年度の会計決算の報告がなされた [総収入：1,854,917 円 (前年度繰越金 1,449,542 円を含む)、総支出：536,150 円、次年度への繰越金 1,318,767 円]。

(2) 平成 16 年度会計監査報告 (会計監査：友永 進)

平成 17 年 4 月 18 日に友永進会計監査、4 月 24 日に吉田彪会計監査が監査を行なった結果、収支ともに適正であり、関係書類も完備されていた旨の報告がなされ、総会出席者により承認された。

(3) 平成 17 年度予算案 (事務局：大竹伸一)

平成 17 年度の予算案の説明があり、総会出席者により承認された。

その他

(1) 学会から学術集会への資金援助について (会長：古田恵美子)

会計決算報告を見ると、繰越金に余裕があるようなので、学術集会の開催に対して、学会の会計から更なる援助金を支出してはどうかとの提案がなされた。援助金支出に対する反対意見は無く、どのくらいの支出が適当かについて、事務局に試算してもらうことで承認された。

会員名簿 (2005年6月22日版) 追加・変更

追加 (新入会)

有木 茂 ARIKI SHIGERU

- 1) 〒812-8581 福岡市東区箱崎 6-10-1
- 2) 九州大学大学院理学府生物科学
生体高分子学研究室
- 3) TEL. 092-642-2634
FAX. 092-642-2634
E-mail. sarikscb@nbox.nc.kyushu-u.ac.jp
- 4) 生化学

EUM, JAI HOON

- 1) 1Ga, Anam-dong, Seongbuk-gu, Seoul,
136-701 Korea.
- 2) School of Life Sciences and
Biotechnology, Korea University.
- 3) TEL. 82-2-3290-3924
FAX. 82-2-3290-3924
E-mail. debris@korea.ac.kr
- 4) Molecular biology of insect.
Insect immunology.

古川 亮平 FURUKAWA RYOHEI

- 1) 〒223-8522 横浜市港北区日吉 3-14-1
- 2) 慶應義塾大学 生命システム情報
- 3) TEL. 045-566-1774
E-mail. mr051340@hc.cc.keio.ac.jp
- 4) 発生生物学・比較免疫学

春田 千晶 HARUTA CHIAKI

- 1) 〒060-8638 札幌市北区北 15 条西 7 丁目
北海道大学大学院医学研究科
病態解析学講座分子病理学分野
- 2) 総合研究大学院大学
北海道大学
- 3) TEL. 011-706-5050 (内) 5900
FAX. 011-706-7825
E-mail. haruta@med.hokudai.ac.jp
- 4)

小宮 あすか KOMIYA ASUKA

- 1) 〒812-8581 福岡市東区箱崎 6-10-1
- 2) 九州大学大学院 生物資源環境科学府
- 3) TEL. 092-642-2896
E-mail. komiyan@kyushu-u.ac.jp
- 4) 魚類の補体系

斉藤 絵里奈 SAITO ERINA

- 1) 〒022-0101 大船渡市三陸町越喜来字
烏頭 160-4
- 2) 北里大学水産学部水族病理学研究室
- 3) TEL. 0192-44-1907
FAX. 0192-44-2125
E-mail. mf04012g@st.kitasato-u.ac.jp
- 4) 魚類免疫学

清水 澄 SHIMIZU KIYOSHI

- 1) 〒160-8402 新宿区新宿 6-1-1
- 2) 東京医科大学 解剖学教室
- 3) TEL. 03-3351-6141 (内) 278
FAX. 03-3351-7886
E-mail. kshimizu@tokyo-med.ac.jp
- 4) 組織学

所屬等の変更

荒木 亨介 ARAKI KYOUSUKE

- 1) 〒252-8510 神奈川県藤沢市亀井野 1866
- 2) 日本大学生物資源科学部
獣医学科魚病学研究室
- 3) E-mail. karakil0@mail.goo.ne.jp
- 4) 魚類免疫学

藤井 保 FUJII TAMOTSU

- 1) 〒734-8558 広島市南区宇品東 1 丁目
1-71
- 2) 県立広島大学人間文化学部健康科学科
- 3) TEL. 082-251-9786
FAX. 082-251-9786
E-mail. fujii@pu-hiroshima.ac.jp
- 4) 免疫機構の系統発生に関する研究

古田 恵美子 FURUTA EMIKO

- 1) 〒337-0015 さいたま市見沼区蓮沼 1250-
9-401
- 2) 比較免疫学研究所
- 3) TEL. 048-686-0205
FAX. 048-686-0205
E-mail. furutaemk@nifty.com
- 4) 陸生軟体動物の生体防御

川畑 俊一郎 KAWABATA SHUN-ICHIRO

- 1) 〒812-8581 福岡市東区箱崎 6-10-1
- 2) 九州大学大学院理学研究院生物科学部門
- 3) TEL. 092-642-2632
FAX. 092-642-2632
E-mail. skawascb@mbx.nc.kyushu-u.ac.jp
- 4) 無脊椎動物の自然免疫の分子機構

菊池 慎一 KIKUCHI SHIN-ICHI

- 1) 〒145-0071 大田区田園調布 5-10-19
(自宅)
- 2) (前)東京歯科大学生物学教室
- 3) TEL. 03-3722-6387
E-mail. kikuchi@peach.ocn.ne.jp
- 4) 魚類の免疫系

小松 功 KOMATSU ISAO

- 1) 〒300-1252 つくば市高見原 2-9-22
- 2) 共立製薬(株) 先端技術開発センター
魚病ワクチン研究開発
- 3) TEL. 029-872-3361
FAX. 029-872-1619
E-mail. iikomatsu@ybb.ne.jp
- 4) 魚病ワクチン

三島 秀規 MISHIMA HIDEKI

- 1) 〒455-0008 愛知県名古屋市港区港町 1-3
- 2) (財)名古屋みなと振興財団
名古屋港水族館
- 3) TEL. 052-654-7080 (代)
FAX. 052-654-7001
E-mail. h-mishima@nagoyaminato.or.jp
- 4)

末武 弘章 SUETAKE HIROAKI

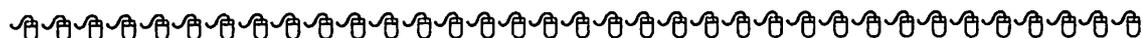
- 1) 〒431-0014 浜松市舞阪町弁天島 2971-4
- 2) 東京大学大学院農学生命科学研究科
附属水産実験所
- 3) TEL. 053-592-2821
FAX. 053-592-2822
E-mail. asuetake@mail.ecc.u-tokyo.ac.jp
- 4) 魚類の生体防御機構

鈴木 譲 SUZUKI YUZURU

- 1) 〒431-0014 浜松市舞阪町弁天島 2971-4
- 2) 東京大学大学院農学生命科学研究科
附属水産実験所
- 3) TEL. 053-592-2821
FAX. 053-592-2822
E-mail. ayuzuru@mail.ecc.u-tokyo.ac.jp
- 4) 魚類の生体防御機構

筒井 繁行 TSUTSUI SHIGEYUKI

- 1) 〒022-0101 大船渡市三陸町越喜来字
鳥頭 160-4
- 2) 北里大学水産学部
- 3) TEL. 0192-44-1908
E-mail. tsutsui@kitasato-u.ac.jp
- 4) 魚類免疫学



事務局より

☞ **所属変更時の通知依頼** (このNewsに掲載の用紙又はe-mailにてお知らせ下さい)
News等の送付に宅配便を利用しております。転送は出来ませんので、宛先となる所属や住所に変更が生じた場合には、学会事務局まで至急ご連絡下さい。

☞ **会費納入願い**

平成17年(2005年)度分の会費(3,000円)未納の方は、納入をよろしくお願いたします。郵便振替/口座番号:00120-4-18034 加入者名:JADCI

会員名簿記載事項変更用紙

(氏名・所属と変更箇所をご記入下さい)

年 月 日

日本比較免疫学会
会長 古田恵美子殿

氏 名 _____

同ローマ字 _____

旧 所 属 _____

新 所 属 _____

連絡先: (〒 _____) (所属先・自宅 一方を○で囲む)

TEL: _____ 内線 _____

FAX: _____

e-mail address: _____

専門分野: _____
